

家族の会ではもともと予定していた7月14日の省庁交渉の際に、環境省と「試行調査」の対象地域の拡大について要求。環境省の担当者から「今回の団地の吹き付けアスベスト曝露者も試行調査の対象となるので、地方自治体への参加呼びかけを丁寧に行いたい」という回答を得た。これを踏まえて私たちはまずは神奈川県や横浜市に「試行調査」の参加を要求していく。

今回の住宅の吹き付けアスベストによる健康被害の発症事例

は、潜伏期間を考えると被害の出始めであり、今後も増えていくと予想される。私たちは引き続きこの問題に取り組んでいくので、ご支援ご協力をお願いしたい。

患者と家族の会は内閣総理大臣及び国土交通・厚生労働・環境各大臣連名宛てに、吹き付けアスベストの使用実態の把握と情報公開、住宅アスベスト被害者の調査等を求める要請書を提出している。



(神奈川県労災職業病センター  
鈴木江郎)

## 二度石綿ショック体験した街 熊本●松橋におけるアスベスト問題

昨年の秋、熊本県松橋(まつばせ)町に住んでいた女性から、アスベストによる健康不安を訴える相談を受けた。「松橋」と聞いてピンと来る人も多いと思う。松橋町には、過去に石綿を採掘していた鉱山があり、掘り出した石綿を用いてスレートを製造する工場が操業を行っていたからである。

この相談をきっかけに、昨年12月と今年3月に中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会の古川会長(当時)らと共に松橋町を訪問し、アスベスト問題に取り組んでこられた方々から貴重なお話を聞く機会を得た。「松橋」におけるアスベスト問題のほんの一端ではあるが、提供を受けた資料等を基に報告する。

### 松橋鉱山の歴史

下益城郡松橋町は、南北に長い熊本県の中間部に位置し、2005年1月に近隣の5町が合併し現在は宇城市となっている。松橋町史によると、明治15年頃に内田の山に石綿が発見され、数人の実業家が採掘し大阪・神戸・堺そして東京などにも販売路を持っていたそうである。とくに、第2次世界大戦前及び期間中は、軍事物質として盛んに採掘され、当時3~4か所の鉱山及び4~5か所の工場が操業していた、とある。戦後は、鉱山、工場とも縮小され、内田地区の鉱山、仁連木工場が防火板や波板などの石綿含有製品を生産していたが、外国の

安価な製品に押され、1970年頃に操業を中止している。最後まで操業を行っていたのは、麻生ボード工業(株)である。

鉱山は、内田の鉱山が最も大きく、露天掘りで、かなり深く掘っていた。現在、跡地はソーラーパネルが敷き詰められ、石綿鉱山であった痕跡はまったく残っていない。他の鉱山(浦川内、朝日川床、内田の南など)は、いずれも露出している大きな蛇紋岩を砕くことにより、繊維を採取していた。

内田の鉱山では、60名前後の人が5~8名の組を作って採掘していた。工場は、豊福地区の仁連木工場が最も大きく、社宅などもあって、かなり大規模に操業していた。農閑期などには、日雇いの人が相当働いていたようである。また、個人の庭先とか近くの谷川などで岩石を打ち砕き粗製品にして、工場に持ってくる人もいた。久具、浦川内、曲野、港町にも工場があった。内田の鉱山は、昭和10~30年頃まで子供たちの格好の遊び場であって、温石(地元の人は「おんじゃっこ」と呼んでいた、滑石)を掘っていたという。

鉱物学的分析結果では、内田の石綿は角閃石族のアンソファイトであり、浦川内など他の鉱山の石綿は、蛇紋石族のクリソタイルとタルクから構成されていることが、労働省産業医学研究所の調査でわかっている。

### 平成元年のアスベストショック

1989(平成元)年10月26日の毎日新聞朝刊は、「石綿で胸膜

石灰化41%」「熊本の旧採掘所周辺」「熊本南病院医師つきょう研究発表」と報じた。

その内容は以下のとおり。「全国の石綿採掘量の約5分の1を算出、昭和40年ごろ閉鎖した熊本県内の旧採掘所周辺に住む50歳以上の住民の希望検診で、41.5%にあたる148人に石綿の吸引が原因とみられる胸膜の石灰化などの病変が見つかったことが熊本県の調査でわかり、26日から仙台市で開かれる国立病院療養所総合医学会で発表される。発がん性が指摘される石綿の人体影響について旧採掘所周辺の調査例はこれが初めて。閉山から20年以上を経過して多数の病変が発見されたことに関係者は大きな衝撃を受けており、今後全国で同様の実態調査が必要となりそうだ」。

翌日には、熊本日日、西日本、朝日、産経、読売新聞も同内容を大きく報じた。松橋町における平成元年のアスベストショックである。

### 熊本南病院の学会発表内容

国立療養所熊本南病院は、石綿鉱山や工場に近い位置にあり、近隣の住民の肺がん検診を担当していた。松橋町に住む40歳以上の町民を対象に、肺がん検診希望者357名を検査したところ、148名(41.5%)に胸膜肥厚斑及び胸膜石灰化像を示す胸膜病変者が見つかった。そのため、平岡医師らが国立病院療養所総合医学会で研究結果を発表するため、松橋町長に報告し了解を求めたのであった。

報告内容は、①胸膜病変の保有率を年齢別にみると、50歳代が35%、60歳代が44%、70歳代が45%、そして80歳代が63%であり、高齢者に多いことがわかった。②148名のなかで、問診のとれた88名中12名には石綿の職歴があった。③残りの76名は近隣曝露者と考えられたが、両者間に胸膜病変の広がり及び程度において差異はなかった。④両者とも胸部X線写真において肺実質に間質性の病変を持つものもなかった。⑤これらのことから、この地区の多くの胸膜病変は石綿による低濃度の長期曝露の影響と考えられる。⑥過去5年間で、この地区の肺がん発生は熊本県の他の地区と比較しても多発している傾向はなく、⑦この地区の中心に位置する国療熊本南病院で、過去11年間に悪性胸膜中皮腫の症例はなかった、というものであった。

胸膜プラーク有所見者938名

熊本県は、平成2年6月に「熊本県松橋地区胸膜対策協議会」を設置し、「胸膜肥厚対策事業」(松橋町が熊本県の補助を受け実施)を開始した。事業内容は、①すべての住民を対象とした健康診査、②胸膜肥厚斑有所見者に対してCT検査の実施、③登録台帳の作成と健康管理システムの構築、であった。

結核健診、肺がん検診で撮影した胸部エックス線写真の読影時に石綿関連所見の有無を判断し、自治体の費用負担でCT検査を実施し、台帳に登録する内容である。クボタショック後に

環境省が実施しているリスク調査も、熊本県と松橋町の取り組みを参考にしていると思われる。

この協議会は、平成6年3月までに7回の会合を開催し、「松橋町及びその周辺地域の胸膜肥厚に関する環境・健康調査報告書」をまとめた。そのまとめでは、「健康調査では、住民健診対象者の81.2%の人が昭和63年から平成5年の間に少なくとも一度住民健診を受診し、その中で、1,357名に胸膜肥厚斑の疑いの者が認められた。胸膜肥厚斑の疑いが認められた者のうち、82.1%の人が胸部CT検査を受診し、その中で、男性472人、女性466人、合計938名が胸膜肥厚斑の有所見者であった。胸膜肥厚斑の有所見者で自覚症状を呈するものはおらず、また、胸膜肥厚斑と関連のある疾病を有している者はいなかった」と報告し、「肺がんの死亡者は県及び周辺市町村と比較し高率ではなかった」「胸膜中皮腫の症例は認められていない」「住民に健康障害を及ぼしている状況はないと考える」と締めくくっている。

熊本県が調査を中止したため、松橋町は独自で胸膜肥厚対策事業を町単独事業として継続し、①精密検査本人負担無料、②住民健康管理システムの継続活用することを決めた。しかし、胸膜肥厚斑の所見が有る住民が938名も確認されているにもかかわらず、なぜこの時点で「熊本県松橋地区胸膜対策協議会」の調査が終了したのか、疑問が残る。

### 二度目のアスベストショック

昨年12月の訪問の際は元松橋町町会議員の右山氏に、3月の訪問の際は宇城市市議会議員の高木氏に協力いただいた。高木氏は、元町(市)職員で、保健予防課に長く在籍した方で、松橋町における住民健診の中心的役割を担ってきた方である。

松橋町は熊本県の補助が終了して以降も、個人負担のない精密検査を継続し、胸膜病変の疑いがある住民についてはCT検査も実施したことは特筆すべき点である。庁内でも様々な苦労があったそうである。そして、住民健診と健康管理システム登録を一体化するため、新たなソフトを開発し、登録者の経過観察を行っていたのである。その後、2004(平成16)年に保守契約(年間70万円)が切れ、翌年の合併により宇城市となり、新たな行政システムとして運用されることになった。ところが登録項目の不備や統計資料の不具合が判明し、他の健康診断との連携が求められていた。

そうした中で2005(平成17)年のクボタショックを迎えたのであった。同年9月、熊本県はクボタショック報道を受け、中皮腫2名と石綿肺3名が死亡し労災認定を受けていたことを発表した。高木氏は、「松橋町民にとっては、二度目のアスベストショックであった」と語られた。

高木氏から提供していただいた資料によると、2004年度末時点の健康管理システムに登録さ

れている市民数(累計)は、1,617人となっている。1988年の初回の健診以降に亡くなられた方が415人、転出者が50名で、クボタショック時点での実質的な登録者は1,152名であった。凄まじいと言えない数である。

2005年末には、地元住民を対象とした無料相談会が松橋町で開催され、宇城市による「アスベストに関する健康問題について」の地域説明会も開催された。しかし、地元の反応は「もうよか」であったと語られた。熊本県民として、水俣病と向き合ってきたが故に漏れた言葉なのだろうか。

最初に相談を受けた女性の胸部画像を専門医が読影したところ、ハッキリとわかる胸膜プラー

クが写っているが石綿肺の傾向はなかった。だが、彼女の父親は麻生石綿で働き、肺がんで亡くなっている。彼女の母親も麻生石綿で働き、石綿肺が疑われている。しかし、労災申請は行われていない。

患者と家族の会の関西支部の会員には、元松橋町の住民で、悪性胸膜中皮腫とびまん性胸膜肥厚を発症した2名の女性がおられる。松橋町(元住民)には、まだまだ被害が埋もれている気がする。

二度のアスベストショックを経験した松橋の事実を知ってほしい。



(ひょうご労働安全衛生センター  
西山和宏)

## 県内初のアスベスト国賠訴訟提訴

### 静岡●耐熱パイプ等製造で中皮腫

悪性胸膜中皮腫と診断された静岡のAさんの奥さんから初めて電話相談を受けたのは、2004年2月。クボタショック以前のこと、当時はまだまだ中皮腫という病名も広く知られていなかった。

1937年生まれのAさんは、1957年6月、耐熱パイプの製造などを行う地元の富士化工株式会社に入社。当時稼働して間もなかった工場では、フジパイプという耐熱性の製品を石綿を紙状にしてポリエステルを染み込ませ、芯になる鉄棒に巻き付け厚みを調整

してパイプに仕上げ、生産していた。Aさんは、粉じんを真っ白になりながら、綿状の石綿を手でほぐす解綿工程の作業に1年従事し、さらに2年ほど、旋盤で切り粉が舞う作業環境のなかで、固まったパイプの耳切工程を担当していた。その後、事務職にも配属されたが、1961年には退職。以降は、いくつかの会社で配線、配管作業や防災機器の配線などの仕事に従事し、独立して自営で働いてこられた。

2004年1月、かぜがいつまでも